

フィンランド通信 (2): フィンランド人を育む教育

横田絵理 (よこた えり)
慶應義塾大学

1. はじめに

この原稿を書いているのは冬真最中のヘルシンキです。この冬は比較的暖冬で雪が少ないヘルシンキですが、2月には子どもたちの「スキー休暇」があります。2カ月の夏休み、クリスマス休暇、秋休暇、そしてスキー休暇と、フィンランドではお休みがたくさんあるように感じますが（授業は8月中旬に始まり、6月初旬までの約190日間）、フィンランドの教育は、PISA (Programme for International Student Assessment, OECD生徒の学習到達度調査)の2006年調査の結果が、57カ国の中で科学的リテラシーで1位、読解力、数学的リテラシーで2位となっていたこともあり、注目されています [1]。また、英 Pearson 社が2012年11月に発表した調査40カ国中の世界の教育水準ランキングではフィンランドはトップでした¹⁾ [2]。フィンランドは、子どもの考える力や応用力を伸ばすことに主眼を置いた教育制度で、少人数学級ですが授業時間が短く、宿題もなく、放課後に塾に行く生徒も少ないとの評価です。今回はフィンランドの教育についての大きな紹介と現地で聞き感じた点をお伝えします。

2. フィンランドの教育

フィンランドの教育文化省が発刊している『フィンランドの教育』は6つの教育の特徴をあげています [2]。

まず教育の平等です。フィンランドでは幼稚園から博士課程までの授業料が無料です。また特別支援教育（通常のクラスで難しいと判断された場合に行う）も通常教育です。これは落ちこぼれを作らない教育として注目されています。「生徒たちがどんな大人になるかわからないからこそ、全員に投資すべ

きであると私たちは判断した。すべての子どもの可能性に賭けたのだ」とフィンランドの教育科学大臣は述べています [3]。

第2は信頼と責任に基づいた教育制度です。国は教育の現場にいる教員たちに法とカリキュラムで方向性を与え、教員の力量を信頼し、評価も学校と教育者による事項評価と国のサンプル調査による学習到達度評価が年1回行うにとどめます。教員は具体的な学習計画と教育内容の質と効果について責任を負います。

第3に子どもの早期、基礎教育を生涯学習の一部と捉えることです。教育はまず6歳で就学前教育、その後7歳から16歳までを基礎教育としています。生徒自身が自己評価できるように育成することが課題です。生涯学習にも熱心で「フィンランドの教育制度には終わりが無い」そうです。

第4は基礎教育後、高校と職業訓練の選択ができる後期中等教育です。高校終了後に最初の全国統一テストがあります。一方職業訓練教育は職業資格が、実働面の成果を含めて認定されます。

第5に二重構造の高等教育です。高等教育は大学とポリテクニクに分かれます。大学は学術研究に重点が置かれ、一方ポリテクニク（応用科学大学）は実践的な面が強調されます。

最後は、高い教育を受けた教員です。フィンランドでは教員による自主的な教育が可能なので、高いトレーニングと教育を受けた教員が必要とされます。教員は修士課程を修了することが求められ、教員になってからも毎年研修に参加しなければなりません。教員こそが教育の要とされ、人気のある職業ともなっています。

3. 自立性を育む教育

こうした特徴を持つ教育は、フィンランドの人々

をどのように育むのでしょうか。

企業では人々のインディペンデント（自立性）の高さをよく耳にしました。個人主義とは違い、自分自身で考え行動結果には自己責任を持つということのようです。フィンランドの人は何にプライオリティをおいて行動するべきか常に考えているように感じます。なぜそのように自立心が高くなるのかと聞くと、教員は子どもに「あなたは今何がしたいのか」という問を繰り返すのだそうです。日本では「次はこれをやりましょうね」という言葉を教員から多く聞かれることを思いますと、大きな違いを感じます。

また大学では学術研究と企業との連携が強くなっています。大学院においては企業からの課題に大学院生がプロジェクトチームで取り組むことが大変重視されています。企業人と一緒に考える機会を授業の一貫として与えられ、企業活動と研究が密接になっています。

4. フィンランド教育の課題

フィンランドでは良い教育が良い労働力を育て、技術開発と高い生産性を実現するとの考えのもとで国家的規模で労働教育をしています[5]。基礎教育後半には職業を念頭に置き準備をしますし、大学院は仕事をしながらの在学が可能です。

しかし、2013年に発表されたPISAの2012年調査の結果では、Finlandはアジア勢に押され、数学的リテラシーは12位、読解力は6位、科学的リテラシーは5位になっていました。フィンランドの教育科学大臣自身が認識している課題は、社会の学校に対する意識が以前より肯定的ではなくなってきたこと、平等を強化することはもちろん、学習への意欲を向上維持させ、学校の環境をより居心地の良いものにしなければならないということです[3;前掲]。教育の平等を徹底し自立性の高い人を育てる一方で落ちこぼれを作らない仕組みは、高い能力を持つ人をどう育てるかが課題とも言えます。

5. おわりに

フィンランドの生活も終わりに近づきました。このフィンランド通信が皆様のお手元に届く頃は、

フィンランドはベストシーズンを迎えます。春、夏にこの国の人々の季節を大いに楽しむ姿勢は、秋から冬の厳しい寒さと昼が短く長く暗い時間を耐えた後にあることを経験し、国が育んだ生活と教育の重要性を深く感じた1年となりました。

フィンランドは研究者の滞在先としても大変有意義な場所であることをお伝えして2回の連載を終わらせていただきます。

注

- 1) 英国の経済雑誌『The Economist』のリサーチ部門でエコノミスト・インテリジェンス・ユニットがまとめたレポート“[The Learning Curve \(http://thelearningcurve.pearson.com/\)](http://thelearningcurve.pearson.com/)”に収められたもので、教育水準を質（学校の自治度、選択肢の豊富さ）、量（義務教育の年数、教師1人あたりの生徒数）、知能（国際学力テストのスコア）、教育成果（卒業率、読み書き能力、雇用）の4分野にわたって精査した。

参考文献

- [1] http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/07/1284443_01.pdf (Feb. 4, 2014)
- [2] http://news.mynavi.jp/c_cobs/news/mamapicks/2012/11/post-47.html (Feb. 4, 2014)
- [3] Ministry education and culture『フィンランドの教育概要2013』, http://www.oph.fi/download/151277_education_in_finland_japanese_2013.pdf (Feb. 4, 2014)
- [4] 猪谷千香「フィンランド教育制度をキウル教育科学大臣が語る「学費無料、テストなし」で世界トップレベルの理由」http://www.huffingtonpost.jp/2013/12/17/finland_n_4457438.html (Feb. 4, 2014)
- [5] 目覚ゆみ『フィンランドという生き方』フィルム・アート社, 2005.

略歴

横田 絵理（よこた えり）

1983年学習院大学経済学部卒業、1994年慶應義塾大学経営管理研究科博士課程単位取得退学。1997年博士（経営学、慶應義塾大学）。1995年から武蔵大学勤務、2005年から現職。